

アラマーエ ハンブルグ・ドイツ

1998年視察

Sバーン（郊外電車）でハンブルグ市内から20分の距離にあるアラマーエ・ニュータウンは最終的には7万人規模になる、竣工は1984年。団地の外側にはアウトバーンが走っており、そこからの騒音を避けるために土手を築いている。ヒューマンスケールを重視して、住宅の高さは樹木より低い4階建てを原則としている。外装材（屋根、壁）は朱色で統一されている。団地内には人工の運河がつけられ、水辺に住宅がつけられるなど、水のある生活を実現している。この運河は、元々この土地が湿地帯で、その水を除くための用水の役目も担っており、水の汚れを防ぐために定期的にエルベ川の水を取り入れて浄化している。

視察したエコ団地の部分はニュータウンの中のほんの一画で、ここだけは草木がぼうぼう、屋根に草がのり、壁はレンガと板で、それもカラフルにするわけでもなく、とにかくエコというものはこうして雑然な雰囲気、他の団地とはまるで違ってしまふのが面白い。

地区の中心に位置する約1.34haの土地に、8人の建築家によりエコロジーに配慮した実験住宅11種類32戸が建てられている。サンルームを用いたパッシブ。上水消費量の少ない衛生設備と分散型中間汚染処理、堆肥化型トイレ。建材は木材や石灰砂岩を用いる他、蓄熱材としてレンガやコルクを用いている。



最終人口7万人になるアラマーエ・ニュータウン。人工の運河がつけられ水辺に赤い色の家が並ぶ。エコ実験住宅はほんの一部だが、そこだけは特殊な雰囲気。



エコ実験住宅はパッシブデザイン。家の並びも並列ではない。



ドイツでもエコ意識のある人は1%

ガイドさんの話「ドイツはエコ意識の強い国だと言われるが、エコロジー住宅に関心のある人は全体の1%しかおらず、食品に関しても1%しかいない」という。確かに、こうした環境共生住宅が注目を集めている状況なのだから、エコはまだ始まったばかりに違いはない。

しかし、緑の党がガンバっていて、子供達へのエコロジー教育が成果を生んでいて、子供達からエコロジーを教えられたという親の話は多い。

運河を利用して水辺に展開する美しく、快適な街づくりを実現しているこの団地の中で、一画だけ異観を放つ環境共生住宅群は、ちょっとテスト感覚が強すぎてそんな違和感を作ってしまう。

環境共生住宅とは内と外を有機的につないだデザインをもった建築で、特別な表情をもつことなく、とても静かに無造作に環境との共生を実現するものである。もっとさりげない全体をみせ、さりげなく自然と共生する生活でなければ、何かギクシャクしてしまうのではないだろうか。

ガイドさんはここでも「ここに生活する人はやはり不満が多いようです。自然に暮らすならもっと自然のある場所で生活すればいいのだし…」といていた。自然との共生というのは自然ばい中にいるということではなく、都会の中で持続可能な街をつくることである。それは必ずしも自然っぽいデザインである必要はないが、色々な面で自然の力を利用する方が有利である。だから、その結果は自然なデザインに近づく。アプローチの仕方ではデザインはバランスを失うのである。

それにしても、ガイドさんの口からはドイツのエコロジーに否定的な発言がどんどん出てくる。その逆に、エコショップの店員からは厳しすぎるまでのバウビオロジー議論が出てくる。エコロジーが始まったばかりであるからこうしたアンバランスが起こるが、北ドイツと南ドイツとでは、感覚の相違があるのかもしれない。



煙突状の開口部はパッシブの装置



屋根緑化、壁面緑化



ウインターガーデン (サンルーム)



雨水貯溜タンクと庭。ちょっと雑然